



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1798-1847年におけるロシア文学とウクライナ文学の交錯：ウクライナ・コサック表象に注目して
Author(s)	上村, 正之
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16963号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/d doctoral.k16963
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99807
Type	doctoral thesis
File Information	Masayuki_Uemura_summary.pdf, 全文の要約



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（学術） 氏名： 上村 正之

学位論文題名：「1798-1847 年におけるロシア文学とウクライナ文学の交錯——
ウクライナ・コサック表象に注目して」

本博士論文では、18 世紀末から 1840 年代までのロシア文学・ウクライナ文学作品、ならびに関連テキストを分析し、両文学が交錯する様相を描出した。この時期の特徴は、ロシア帝国の首都サンクト・ペテルブルグが共通の文壇として機能し、同地にてウクライナ人のウクライナ語作品も出版され、ロシア人もロマン主義的な「ウクライナ愛好」Ukrainophilia の流行の中でウクライナを題材にした作品を書いた点にある。他方、当該時期における両文学・文化の非対称な関係（とりわけロシア中心主義的なウクライナの言語・歴史に関する言説）や、両文学が緊張関係を孕みながら自己形成していった点は十分に分析されてこなかった。本稿では、イワン・コトリャレウシキーの『エネイダ』（初版 1798）から、タラス・シェウチェンコがキリロ・メフォディー兄弟団に連座した年で逮捕された年（1847）までのテキストを対象とした。特に、ウクライナ・コサックの表象に注目し、両文学における歴史・民族・文学・美学に関する見方の差異を浮き彫りにした。

第 1 章では、ロシア帝国における「ウクライナ愛好」期のウクライナ（語）文学や文化の位置づけについて確認した。ハルキウ大学の学生であったロシア人アレクセイ・リョーフシンによる旅行記『小ロシアからの手紙』（1816）では、ロシアと「小ロシア」（当時のウクライナの公称）の間の言語・習俗の差異が明確に認識されていた一方で、独自のウクライナ文学の発展に関しては否定的な見解が示されていた。他方でフルーヒウ出身のオレクシー・パウロウシキーによる『小ロシア方言文法』（1819）では、ウクライナ語をロシア語の下位にある「方言」として定義しつつも文法的な規則を記述し、固有性においてはロシアの他地域の方言とは一線を画すと主張していた。ウクライナ（語）をめぐって「地方」（方言）とみなすロシア帝国の言説の内部においても、ロシア人とウクライナ人の中での見解の差異が早い段階から確認される。

同じく第 1 章では、ヨーロッパのナショナリズムおよびロマン主義の勃興を背景に、ロシア文学において「ナロードノスチ」（民族性・国民性）の重要性や実体に関する議論が展開され、同概念がロシア人だけでなくウクライナ人にも受容された様相を記述した。例えば、ウクライナ人の歴史家マクシモーヴィチ『小ロシア歌謡集』

（1827）の序文において、既に時代の重要概念として認識されていたことが伺える。このマクシモーヴィチは 1840 年にリヴィウのルーシ人に宛てた手紙の中で、「ウクライナはルーシという名称すらもロシアに奪われた」とも述べていた。ハルキウ出身の

オレスト・ソモフによるロシア文学論「ロマン主義詩について」(1823)では、ロシア帝国を多様な地方・民族の集合とらえ、ウクライナもそうした地方の一つに数え入れつつ、ロシア語作家がそれらの周縁的な地方・民族を題材にして「国民文学」を創出することを訴えるという、ある種のねじれが確認される。一見この主張は帝国内部の諸民族の「ナロードノスチ」を肯定的に捉える一方で、見る側／見られる側の主客の力関係を固定化する危険性があった。またベリンスキーは1834-35年頃の批評において、ロシアの「ナロードノスチ」に基づく国民文学の創出の手段として、現実生活の描写に基づく「リアリズム」を提案しつつも、ゴーゴリの「ウクライナもの」作品を高く評価した際は、ウクライナの「ナロードノスチ」を描出する「リアリズム」よりも、ゴーゴリの芸術的独創性を重視して、彼を「プーシキン後のロシア文学の頭^{かしら}」と評した。このように、同時代のロシア文学においては、ウクライナはあくまでも描かれる客体に留まり、ロシア文学の関心はそれ自体の主観性・独創性・「ナロードノスチ」にあった。

第2章では、ウクライナ近代文学の嚆矢であるコトリャレウシキー『エネイーダ』(初版1798, 第二版1809, 完全版1842)を取り上げ、民衆バロック文化に起源をもちつつ、古典主義の「低位」のジャンルたるパロディ叙事詩の形式で展開された世界観について分析した。ウェルギリウスの『アエネーイス』をウクライナ風にパロディし、ウクライナ文化の百科事典とも評される同作品は、民族誌的な細部に富みつつも18世紀までのヘーチマン国家時代へのノスタルジアも表明されており、ロシアの文壇で「ナロードノスチ」という語が議論される以前から、より明示的な形で民族性・民衆性が展開されていた。コトリャレウシキーの『エネイーダ』において形式面・構成面で「下敷き」になったのは、オシポフおよびコテリニツキーによって書かれたロシア語版『エネイーダ』(1791-1808)であった点は先行研究でも指摘されている。他方で、コトリャレウシキーの最大の特徴は、ギリシャ・ローマの英雄をウクライナ・コサックを用いてパロディした点にあり、滑稽かつ庶民的な風俗に生きながらも英雄としての顔をもつコサック表象(同時にこの表象はバロック時代の幕間劇^{インテルメーディア}に起源をもつ)は、ゴーゴリのようなロシア語作家にも継承された。

第3章では、ロシアの劇作家アレクサンドル・シャホフスコイによるボードヴィル『コサックの詩人』(1814)と、それへの批判的応答であったコトリャレウシキーの戯曲『ナタルカ・ポルタウカ』(1819)を分析した。後者が前者への批判として成り立ったのは文学史的な事実として広く認められている。本稿では両者の比較の足掛かりとして、1775年に廃止されたザポロージェ・コサック軍団から再編成された黒海コサック軍団の長アントン・ホロワーティーによる詩を手掛かりに、ウクライナ・コサックが帝国に対していかに「忠義」な存在として表象される必要があったかを考察した。当時ロシア帝国の中で知られていたホロワーティーの二つの詩は、自らの忠勤を引き合いにして、コサック軍団の復活を権力者に訴えるものと、感謝するものであっ

た。そのように無害化されたコサックの姿は、ポルタワの戦い（1709）の後のウクライナを舞台にしたシャホフスコイの『コサックの詩人』にて見ることができる。この作品では、イワン・マゼーパの離反という歴史的背景は言及されず、主人公の「コサックの詩人」ことセメーン・クリモウシキーの歴史的な輪郭も捨象されている。コトリャレウシキーの『ナタルカ・ポルタウカ』は同時代のポルタワを舞台にし、ポルタワの戦いを引き合いにしてウクライナ人の帝国への忠実さが仄めかされているものの、『コサックの詩人』で用いられた不正確なウクライナ語や、歴史的知識の誤りが揶揄されている。この作品は、ロシア人のウクライナへの無知が批判された初期の例でもあった。何よりも『コサックの詩人』は現地の恋人たちの問題を外部から来たロシア人の公爵が解決する筋であるのに対し、『ナタルカ・ポルタウカ』にはロシア人は登場せず、登場人物たちの道徳的徳と感受性によって解決することで、ウクライナの自律性が構造的により明確になっている。

第4章では、デカブリスト作家であったフョードル・グリンカ、ルィレーエフとプーシキン『ポルタワ』を比較した。共和主義的理想を前景化した「市民詩」を手掛けたデカブリストにおいて、ボフダン・フメリニツキーやイワン・マゼーパは、汎ヨーロッパ的な自由・解放の英雄として描かれた。ルィレーエフ『ヴァイナロフスキー』（1825）は、前書きや注にて公式的なマゼーパ＝裏切者の言説を歴史的事実として提示しつつも、物語中ではマゼーパをウクライナの解放の英雄として描くという手法をとっている。これは当時のロシア人によるマゼーパの最も好意的な表象であった。これに対して、デカブリスト蜂起鎮圧後に書かれたプーシキンの『ポルタワ』（1829）は、帝国史観を反映したバンティシ＝カメンスキー『小ロシア史』（1822）に基づいており、詩人は公式言説の枠内で「悪人」マゼーパを描いたことを「歴史的正確さ」と主張していた。『ポルタワ』はロシア帝国におけるマゼーパ像の楔として機能し、ウクライナの歴史的主体性・自律性を主張する言説はますます困難になった。例として、マクシモフ・ヴィチも『ポルタワ』の批評において、「悪人」・「逸脱者」としてのマゼーパ像の歴史的正しさを認め、ウクライナ人がいかに忠義な民族であるかを主張していた。

第5章では、ロシアの帝國的ナショナリズムの発露として解されがちであったニコライ・ゴーゴリ（ムィコーラ・ホーホリ）『タラス・ブーリバ』（1835 初版/1842 改稿版）について、近年の研究成果をもとに修正を試みた。とりわけゴーゴリが未刊行の断章「マゼーパの瞑想」（1834-35）のようなテキストにて、ロシアに脅かされるウクライナの国民性を記述したり、同時代のウクライナ人によるテキストに通じていた点は重要である。当時のウクライナ人およびロシア人と同じく、ゴーゴリは両民族の歴史的・文化的差異を認識しており、両民族の一体性を自明にしていたとは言い難い。『タラス・ブーリバ』改稿版にて頻出し、邦訳にて「ロシアの」「ロシアの地」と訳されてきた *русский, русская земля* という語にしても、同時代のウクライナ人の

著作物における用語法と、作中のコンテクストを照らし合わせると、「ルーシ（の地）」＝ウクライナと解することが自然である。作中第9章でタラスが放つ演説や、最期の瞬間に述べる予言についても、ウクライナ・ナショナリズムの観点から解釈する。すなわち『タラス・ブーリバ』改稿版は、ロシア人の視点で読んだ場合は「広義のロシア人」たる「小ロシア人」が、ロシアの歴史的な宿敵たるポーランドの抑圧に抗する物語として共感を呼び起こすが、ウクライナ人の視点からは「ルーシの地」を空間的に継承したコサックの民族的叙事詩としても読まれうる。

第6章では、ロシア文学史とロシア思想の形成に大きな役割を果たしたヴィッサリオン・ベリンスキーによる、クヴィトカ＝オスノヴァネンコやシェウチェンコらウクライナ語作家に対する批判とその応答を取り上げた。1840-1844年頃にかけて、ベリンスキーはウクライナ語作品やウクライナ人による歴史記述に対し、ヘーゲルの歴史哲学をいわば保守的な形で援用し、国家なき民族の「文学」や「歴史」の不可能性や、ウクライナ人はロシア語で作品を書くべきという主張を『祖国雑記』誌上にて展開した。これに対し、シェウチェンコの物語詩『ハイダマキ』（1841）では反論を含む詩行が展開され、題材（1768年のハイダマキ蜂起）や語りのレベルにおいても、大文字の「歴史」に対する民族・民衆の「記憶」を前面に出している。また「ウクライナ語散文の父」と評されるクヴィトカ＝オスノヴァネンコは、『祖国雑記』編集者であったクラエフスキーへの手紙の中で、ウクライナ文学の存在を否定する記事を掲載した同誌に抗議の手紙を送り、ベリンスキーを名指ししないまでも激しい批判を展開した。さらに、キリロ・メフォディー兄弟団の指導者の一人となるコストマーロウは「小ロシア語作品の概観」（1843）という論説でウクライナ文学史を記述した。ウクライナ文学にとって大きな意味を持つのは、1847年に官憲に押収されたシェウチェンコ「未刊行の『コブザール』序文」（1847）である。ここではロシアのジャーナリズムのウクライナ文学批判に対する反論が展開されており、ロシアの帝國的制度の外において新しいウクライナ文学を求めるマニフェストとして位置付けられうる。

結論部では、これまでの議論を概括し、第一にデカブリスト蜂起が鎮圧された1825年が両文学の交錯において大きな転換点になった点を指摘した。これ以後、共和主義的な自由の担い手、あるいは歴史的主体としてコサック表象はロシア帝国において困難になり、代わってヒエラルキー（階層的秩序）に特徴づけられるロシア／ウクライナ観が支配的になった。第二にロシア人によるウクライナ文化・歴史への無知や、帝国内の他民族の主体性を軽視する帝國的知のあり方が、しばしばウクライナ人からの反論を呼び起こした事実が確認され、ついにはロシアと共通の文学空間からの「分離」を引き起こした。このような両文学、および文学が内包するナショナリズムが交錯するダイナミクスは、ウクライナ人のテクストに隠されたアイロニーや、私的な手紙・未公刊作品などの言表、また帝国内では比較的マイナーな媒体（^{エリマノフ}文芸雑録など）の記述の検討を通して明らかになった。